

～ がん看護専門看護師の役割と活動 ～

がん看護専門看護師として活動を始めて13年を迎えました。活動当初、当院には前年に資格認定を受けていた専門看護師（CNS：Certified Nurse Specialist）1名が在籍していたのみであり、CNSとは何者なのかを組織に知っていただくところから始まりました。他領域のCNS4名とともにそれぞれが実践をリフレクションしながら、検討を重ねてきたことが思い出されます。

私は看護師になり、多くのがん患者さんと出会う中で、痛みや呼吸困難などで苦しむ患者さん、繰り返し入院治療を受けながらも進行していく患者さん、子どものことを心配する患者さん、そして家族へのケアに悩み、がん看護を深く学ぶために大学院へ進学しました。大学院修了後は、診断から治療期の多くを過ごす「外来は孤独」と話された患者さんの言葉を受けて、外来看護を学ぶために外来への配属を希望しました。



がん患者相談室での話し合いの様子

その後、緩和ケアチーム看護師として多職種チームでの活動や、外来の患者さん・家族の自律を支えるがん患者相談室での相談対応をはじめとする体制づくりに携わってきました。そして、今年度よりがん看護専門外来をがん看護領域の看護スペシャリストとともに立ち上げたところです。実践では、たとえば、患者さんが診断を受けて混乱するなかで治療選択の意思決定を支えます。また、子どもや高齢の親にどのように伝えたらよいかともに悩み、考え、伝えることを支え、その後の家族のケアも大事にしています。患者さん、家族の苦痛を緩和し、QOLの維持・向上をめざすためには、依頼してくださる診療科の医師や看護師とともに強みを活かしたチーム医療を行うことが重要であり、それを実感する日々です。時折、倫理的課題に遭遇したり、ジレンマを抱える看護師や医師に出会います。それぞれが大切にしていることがあり、その不調和がどこにあるのか、患者さんにとっての最善をめざすために多角的な視点で分析することでケアの方向性が見いだせるよう一緒に検討させていただくこともあります。

現在、緩和ケアチームやがん患者相談室の活動の他に、看護部教育担当を兼務しております。主に倫理を担当しており、実践と教育をつないでいくためにも実践者である強みを活かして、違和感やジレンマを言語化することを支え、そして拾い上げることで実践と倫理が深く結びついていることを感じてもらうこと、そして、患者さんにとっての最善をどのように考えていったらよいのかなど、私自身も学ばせていただきながら皆様と立ち止まっていけたらと思っています。